2026 年 10 月 16 日　第 97 回運輸政策セミナー

「地方都市の持続可能化・強靭化に貢献しうる鉄道の可能性と実現策」

来賓挨拶

皆さん、こんにちは。ご紹介をいただきました、国土交通省の国土交通審議官の鶴田と申します。

本日、オンラインの方も含めた本当に多数の皆さまご参加のもとでセミナーが開催されますこと、心からお慶び申し上げます。また、お招きをいただきましてありがとうございます。

私、この夏に国土交通審議官に就任いたしましたが、20 年ほど前に宿利会長がこの仕事をなさっていたなと思い起こしました。その時々の課題をしっかりと受け止めて政策を前に進めていくこと、これを代々しっかり続けていくことの大切さを改めて感じた次第です。先ほどお話がありましたような「これからの鉄道をどう考えていくのか」「公共交通というものをどう考えていくのか」といった重要な課題に、私もこの職責を預かる者としてしっかりと取り組んでまいりたいと、思いを新たにしたところです。

本日お声がけをいただいたのは、一つには金山先生と私の長いお付き合いもあるのかなと勝手に思っております。私は、役所に入って 36 年あまり経ちますが、入省して 1・2 年目の頃は当時の官房国鉄部、そして鉄道局に在籍をしておりました。そこに金山さんがよく来られておりまして、ご存じの方も多いと思いますが、歌がすごくお上手で手品もお上手という、非常に楽しく愉快な方でもいらっしゃいます。

そのうえで、先ほど宿利会長からお話があったような素晴らしい業績をお持ちです。私が入省して十数年経った課長補佐の頃に、都市鉄道等利便増進法の立案と予算制度の折衝を担当しておりました。その際、金山先生が当時、鉄道・運輸機構（鉄道建設・運輸施設整備支援機構）で調査課の総括をされており、何十回打ち合わせをしたか数え切れないほどですが、そうした積み重ねがなければ制度やプロジェクトも

実現していなかったのだろうと思っております。

その後、金山先生がそれを博士論文としてまとめられたものが、高く評価され学位の取得にもつながったとお聞きした際は、まるで自分のことのように嬉しく思いました。ちょうどその時、私は法律の作業が終わって海外勤務をしておりましたが、金山先生からその博士論文を送っていただき、今でも大切に保管しております。

本日のセミナーでは、地方鉄道をテーマに、鉄道の持つ社会経済的な価値をどうやって高めていけるのか、運行頻度を高めるようなことも含めて、都市側がこれを「公共財」としてどう主体的に関わっていくかといった点について、冒頭にご講演されると伺っております。

何事も政策を行う上では「費用と効果」があるわけですが、本日お越しの皆さまには、オンラインの方も含め釈迦に説法であるものの、世間一般では「効果」と言ったときに採算性を前提にした、いわゆる「供給者便益」と混同されるきらいもあるのだと思います。しかし、政策を実現するために考えるべき効果というのは本来もっと広いものですし、費用がかかるのは事実であるため、それを「誰がどういう風に負担するのか」というのも本来さまざまであるはずです。本日これからのご講演やパネルディスカッションで、そうした点も浮き彫りになってくるのではないかと期待しております。

あいにく洗練された例えが思いつかず世俗的で恐縮なのですが、今日何を食べようかと考えたときに「1,000 円のラーメンを食べたい日」もあれば「1 万円のコース料理を食べたい日」もあると思います。その際には「これがいくらかかるもので、ここで食べればどれくらいの満足が得られるか」を無意識のうちに想定しているはずです。昨今で言えば、ネットで検索することでその満足度の確からしさもより高まる、といったことにもなっています。

そういう意味で言いますと、鉄道を、特に今日テーマとなる地方鉄道を「都市経営」という目で見たときに、それが「1,000 円のラーメン」なのか、それとも「少し手を加えると 1,500 円の特製ラーメン」なのか、あるいは「1 万円のコース料理」なのか。

都市のさまざまなステークホルダー、つまり住民、企業、来訪者などを念頭に置きながら都市経営の視点で判断をする際に、「このメニューは一体何なのか」ということが比較できるようになっていることが、地域として選択していく大前提になるのだと思います。

金山先生の論文は私も一通り読ませていただきましたし、本日のパネルディスカッションでもそうした点につながってくるのだろうと考えております。私自身も後ほど拝聴する時間を楽しみにしております。

我々も、そうした点を含め、冒頭申し上げましたように政策を前に進めてまいりたいと思っております。ありがとうございます。